

第11話 三国干渉と遼東還付

戦勝の利を得て大いに歓呼していた我が国民の頭上に落ちた晴天の霹靂。
 露独仏の三国から来た無法な干渉に、無理往生で遼東半島を還付する。
 国民は皆涙を呑んで他日の報復を誓う。臥薪嘗胆。

三国干渉と我が国民の覚悟

三国干渉の事は、普通、日清戦争の終わりのところに付けてお話することになっているが、私は今、特にここに一話を設けて見ることにした。というのは、今日から振り返って歴史の流れを見ると、この三国の干渉は、実に今日の日本を、世界的な日本を造るに至った最も大きな、最も力強い拍車の一つであって、やがてまた我が国史における最も重大な事件の一つであると思うからです。

「敵国外患あればその国殆からず」という言葉がある。常に目の前に敵を控えていれば、苟くも油断することが無いからの謂です。日清戦争で、我が国は清国に対して連戦連勝して遺憾なくその暴慢を撃ち懲らしたが、忽ち、思いもよらない三国の干渉を受けて、無念や、折角わが将兵の貴い血を流して領有することになった遼東半島を、悲憤の涙を呑んで清国に還付しなければならなくなったのです。日本国民として、だれがこの無法な圧迫に対して、いつかは報復しようと思わない者があろう。国民は皆、臥薪嘗胆を誓って、この屈辱を雪ぐべき日を一日も早く迎えようと努力した。

しかし、いったい、どうしてこういう無法な干渉が起こったのだろうか？

戦前に列国の見た日本

初め、日清両国の間に戦端が開かれた時に、欧米の列国は皆次ぎのように考えた。「よしんば最初のうちこそ日本が勝っても、結局は、必ず日本が敗れるにちがいない」と。今日の皆さんは、彼等がどうしてそのように考えたのかと不審にさえ思うでしょうが、当時の日本を考えてみて下さい。

本州と四国と九州と北海道と、琉球諸島と千島列島との外には、こまごました付属諸島があったばかりの日本です。当時の日本には、朝鮮もなければ樺太も無かったのです。台湾も澎湖列島も無かったのです。況して南洋諸島や関東州は勿論無かったのです(訳注:昭和初期と比較しています)。

しかも開国以来日が未だ浅くて、条約の上でも諸外国と対等のつきあいが出来ずにいたことは、すでに、「条約改正と法典の編纂」の話で述べた通りです。

一方で、清国は東洋の一大強国でして、領土も広く、人口も多く、富んでもいる。陸軍兵の多いこととは言うまでもなく、海軍もまたはるかに日本に比べて優勢でしたので、列国が日本を清国の敵では無いと見たのも不思議ではなかったのです。

実力を知って後の猜疑

ところが、開戦以来、彼等が弱いと見ていた日本は頻りに勝った。連戦連勝した。彼等は先づ

第11話 三国干渉と遼東還付

目を丸くして驚いた。初めのうちは、それでも感心し、敬服し、賞賛していたが、我が軍の強さがだんだん測り知れなくなると、ついに彼等は恐ろしくなり出した。彼等は日本の勝利を嫉んだ。そして、今のうちに頭を抑えて、大きな顔をさせないようにしようと考えたのです。いってみれば、自分たちは決して同等な国にはなれないと思っていた者が、いつの間にか成長して、堂々と大手を振って闊歩するようになったのを黙ってそのまま見ている気がしなかったのです。

ロシアの野心

わけてもロシアが一番これを気にかけた。というのは、ロシアは前々から自分が満州方面に勢力を伸ばして、朝鮮の領土内か、もしくは満州かにおいて良港を得ようと企てていたのに、もし日本が戦勝者としてアジア大陸に根拠地をもつようになれば、自分の野心を遂げることが出来なくなると考えたからです。

そこで、いよいよ講和条約が締結されて、遼東半島が日本に割譲される事となると、ロシアは真先に起って、ドイツおよびフランスを誘い、三国連合して我れにこの還付を迫る事となったのです。

明治28年4月23日、即ち、前にも少し述べたように、4月17日に講和条約が調印されて、まだ一週間も経たないうちに、東京駐在のロシア、ドイツ、フランスの三国の公使は、相前後して我が外務省を訪ね、次の意味の覚書を提出した。

「日本国が遼東半島を領有するのは、啻に清国の首府北京を危うくする虞があるばかりでなく、朝鮮の独立を有名無実に戻させ、永く東洋の平和を害するものであるから、よろしくこれを放棄されたい。」

大本営における御前会議

戦争で、連戦連勝して完全に占領した土地を、戦勝者の権利として当然獲得したつもりであった我が国に取って、これは実に意外な勸告でした。晴天の一大霹靂でした。広島の本営では、翌24日、御前会議を開いてこの勸告をいかにすべきかを議した。容れるか？ 拒絶するか？ 容れるのはいかにも残念だが、拒絶するには更に三国を相手として戦う決心でなければならない。

ところが、この時、ロシアの軍艦はすでに我が国の諸港に集まって戦闘準備をしていたのに、わが艦隊は挙げて澎湖島方面に出動していたし、陸軍の主力は勿論まだ満州にいたのです。それに軍費もすでに二億円余りを使って、財政の上からいっても、この上新たに敵国を加えることは頗る無謀でした。

そこで、会議の結果は、むしろ列国会議を開いて、遼東半島の問題はその会議で処理させることにしようという事に決したので、すなわち伊藤博文総理大臣はその夜すぐに広島を發して、翌25日の早朝、折から病気のために舞子に転地療養中であつた陸奥外相を訪ねてその意見を聞いた。

遼東半島の還付

ところが、陸奥外相は、列国会議の招集は我れから求めて世界強国の干渉を導くものに外なら

ないからとの理由で、これに反対した。そして、ともかくも一応、三国の勧告はこれを拒絶して、その後の様子を見ることにしようという事になったのだが、ロシアに再考を求めさせた駐露公使西徳二郎から折り返しの報告で、ロシアの主張がすこぶる固く、到底動かすことの出来ないのを知り、又、駐英公使加藤高明らの報告で、イギリスを始め、日本に援助を与えようとするものもないことも分かった。

我が政府は止むをえず、ついに三国の勧告を容れて遼東半島を還付することに決し、5月5日、その旨を三国に通告した。そして5月8日に、芝罘で日清の講和条約の批准交換が終わって後、5月10日付けをもって天皇から遼東半島還付に関する以下の詔勅が發布された。

朕、先きに清国皇帝の請いにより、全権弁理大使を命じ、その簡派する使臣と会商して、両国講和の条約を締結した。

然るに、ロシア、ドイツ両帝国およびフランス共和国の政府は、日本帝国が遼東半島の壤地を永久に所領する事は、東洋永遠の平和に利あらずとして、交々朕の政府に、その地域の保有を永久にしない事を勧めて来た。

願うに、朕が常に平和に胸に思い、ついに清国と兵を交えるに至ったが、まことに東洋の平和をして永遠に強固にする目的に他ならない。それで三国政府の友誼を以って考えると、その目的は同じことである。

朕、平和の為に計る素より之を容れるにやぶさかでないのみか、更に事端を滋くして、時局を考え、治平の回復を遅滞させ、以って民生の疾苦をかもし、国運の伸張を阻むは、真に朕の意にあらず。且つ清国は講和条約の締結により、既に渝盟を悔いる誠を致し、我が交戦の理由および目的を天下に柄焉たらしむ。今に於いて大局に顧み、寛洪も以って事を処するも、帝国の光栄と威厳とに於いて毀損するところはない。朕すなわち友邦の忠言を容れ、朕の政府に命じて、三国政府に照覆するにその意を以ってさせた。半島地域の還付に関する一切の措置を、朕は特に政府に命じて、清国政府と商定させる。今や講和条約既に批准交換を終え、両国の和親は旧に復して、局外の列国もまたこの交誼の厚きを加え、百僚臣庶それよく朕の旨を体して、深く時勢の大局を視、微を慎み漸を戒めて、邦家の大計をあやまる事無きを期せよ。

臥薪嘗胆を誓う

国民はことごとく泣いてこれを拝読した。中には、外交の衝に当たった者の無能を責めて、「戦争に勝って外交に敗れた」と謗り罵った者も少なくなかったが、しかし、結局は、我に実力が十分に備わっていないところから起こった事なのに気がついて、なげき悲しみ憤った挙句、涙を吞んで、これより挙つて臥薪嘗胆を唱え、国力の充実をはかり、他日に報復の機会の来るのを待つ事とした。

この時、明治天皇は、「遼東半島還付に際して」と題されて、

第11話 三国干渉と遼東還付

と さお こころなが こ ぎよ せむ あしま こぶね わ
取る棹の心長くも漕ぎよせむ 葦間の小船さはりありとも

よ
と詠まれている。「深く時勢の大局に視、微を慎み漸を戒め、邦家の大計を誤ること無きを期せよ」と国民を深く諫められた一方、いかに強い決心をしかもおおらかに、持たれていたかが拝察される。

国民の民族的自覚

なお、この戦勝によって我が国は東洋の一大強国として認められ、大いに国民の民族的自覚を高めさせたが、同時にまた、この三国の干渉によって被った屈辱のために、これまで東洋の一角にのみ注いでいた我が国民の眼を転じて、更に広く遠く、世界の形勢に注がせるようになった事も忘れてはならない。東洋の事が、決して東洋の国のみによっては解決されないという事が明らかにされたからです。私が三国の干渉を以って今日の我が世界の大日本を造るに至った最も力強い拍車の一つと見るのも、つまり、このためです。

さて、遼東半島の還付の実際については、その後、我が特命全権公使 林 董 が北京において清国の全権 李鴻章と談判を開き、数回の会見を重ねて、明治28年11月8日、ついに還付に関する条約六か条を定め、半島還付の代償として庫平銀三千両を我が国に収める事とした。

戦後の朝鮮

又、朝鮮は、戦後、全く清国の干渉から免かれて、ますます我れを信頼するに至ったが、たまたま遼東半島還付の事があって、ロシアの勢力が日本を圧迫したかに見え、忽ちまた例の事大主義の徒はロシアと結んで、漸く親日派に当たろうとした。即ち、ロシアが新たに清国に代わって出て来たのです。しかし、我れはそれには構わず、なお着々と朝鮮の独立の実を挙げさせるに努めたので、ついに明治30年10月、朝鮮は国号を韓と改め、国王李熙は新たに皇帝の位に即いて、独立国の体面を整えるに至った。

(第11話 三国干渉と遼東還付 終わり。 次は前頁に戻り、第12話 台湾の征討)